2016年度
（一財）前田一歩園財団「森の学校」事業／教育の森
「きっかけポン！教育の森」プロジェクト（報告）

2017. 5. 28
北海道教育大学釧路校　境　智洋

１：きっかけポン！教育の森　とは

（一財）前田一歩園財団「森の学校」事業／教育の森に係る事業趣旨、方向性と協働し、阿寒の森を、未来を担う子どもたちに学習の場として活用させるため、教員の卵、教員、そして阿寒の教員に「森の教育的な価値」を理解させるきっかけ、さらに森が好きなり、森を活用してみたくなるきっかけが必要であり、そのきっかけから一人一人が湧き上がる、「教育で活用してみたい」「何かやってみたい」という気持ちが湧き上がってくることを「ポン」で表した。そこで、本プロジェクトを、「きっかけポン！教育の森プロジェクト」と名付けた。

２：実施報告

（1）自然を活用できる人材の育成

目的　問題解決のプロセスを学生自身が体験することは科学を学ぶ上で重要である。とりわけ、阿寒の森では問題解決の最初の段階である「課題を発見する場面」を重視する。夏と冬の森で様々な自然を体験させ、この中で様々な疑問や課題を見いださせる。このことが興味関心を引き出すだけでなく、生涯にわたって森に関わっていきたいという意欲につながる。子どもたちに森で何をさせればいいのかを考える教員ではなく、教師自身が子どもたちと一緒になって調べていきたいという課題を持つこと、このことが、子どもたちと一緒になって森を学習の場に転化させていく教員を育てていくことになる。森を活用できる人材をつくるそのきっかけとする。

講義名　学校体験地域理解実習Ⅰ

A　春の活動　平成28年6月2日～4日（参加23名）

○1日目PM オリエンテーション

図１　山本氏による森の概要講義

図２　森のレクシャー

前田一歩園財団自然普及課長　山本光一氏に森の概要を講義して頂く。その後、光の森で自然散策し、森の概要をつかんだ。

○2日目　きっかけの森アクティビティー　１・２　（自然とふれあう）（課題を見つけよう）

図３　自然とふれ合う

図４　課題を見つける

午前では、昨日の森の観察から、自分で深く見てみたい場所に移動して観察を行った。午後は、調べてみたいこと、やってみたいことを実現させるために、個々の活動を行った。夜には、振り返りミーティングを行い、個々の課題を発表し合った。初日の視点から、視野が広がっていくのを一人一人が実感する時間となった。

○3日目 AM　きっかけの森アクティビティー　3　（課題を深めよう）

図5　湖北の森のレクチャー

図6　湖北の森の散策

午前は、湖北の森で新しい視点で森を観察した。動植物の違いや、岩石の違いなどを観察し、新たな視点で観察した。

○3日目 PM　まとめ

図7　最後のミーティング

図8　最後のコメント

3日間の成果を発表しあった。1人1人の森の見方が変わってきたことを交流した。

B　冬の活動　平成29年2月15日～17日（参加15名）

○1日目 PM　オリエンテーション

図9　スノーシューで歩く

図10　森の中で蔦を探す

スノーシューで歩く事に慣れること、冬の森の変化に気づくことを目的に実施した。

○2日目　森の中での個々の課題を追求する時間

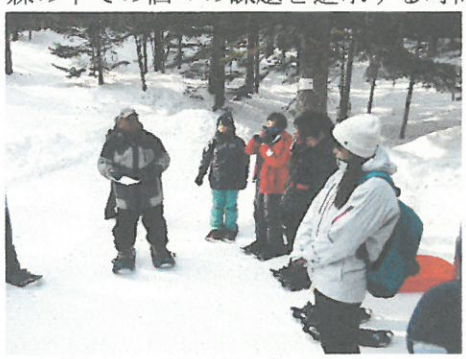


図11　歩き回りたい！

図12　穴を掘ってみたい

冬の森でやってみたいことを実現する。「森の中で歩く」「森で生き物を見つける」「森で住む」「森の鳥を追う」個々のやりたいことを徹底的に行った。

○３日目　森の中の個々の課題を追求する（個々までの成果を見つける）

図 13　最後の観察

図 14　成果発表

冬の森で得た「気づき」を交流した。夏から１人１人の視点や考え方が変わってきていることがわかる。

(2) 道東科学教育ネットワーク（教員研修）での教員実習

目　的　教師にとって森を活用することは普段は考えることがない。ゆえに、教師が森でのアクティビティを存分に体験し、自分なりに森を活用したいと思うきっかけをつくることを目的とする。

日　時　平成 28 年 6 月 19 日

参加者　人数　８名

実施状況

8:00　釧路発
10:00　阿寒の森（着）
13:00　アクティビティ（森での様々な活動を行う）
16:00　まとめ
18:00　釧路着

図 15　湖北の森の観察

図 16　生物観察

図 17　光の森の観察

図 18　振り返りミーティング

湖北の森、光の森を回り、森の活用方法について検討した。

(3) 阿寒の自然を愛する子どもの育成

阿寒湖小学校の取り組みの支援

目的　学校との連携は、外部講師との信頼関係の中で築かれていく。この森を使った活動を先生方

と行って行くには、先生方のニーズや関心事をリサーチし、先生方にとってプラスと感じるような活用方法を探っていくことが重要である。そのために、まず先生方と信頼関係を築き、森を使おうとするきっかけをつくる。そのため、本年度はニーズの高い火山の授業を行い、次年度以降の活動へつなげていく。

図 19 火山噴火による災害の範囲

図 20　雌阿寒岳降灰実験

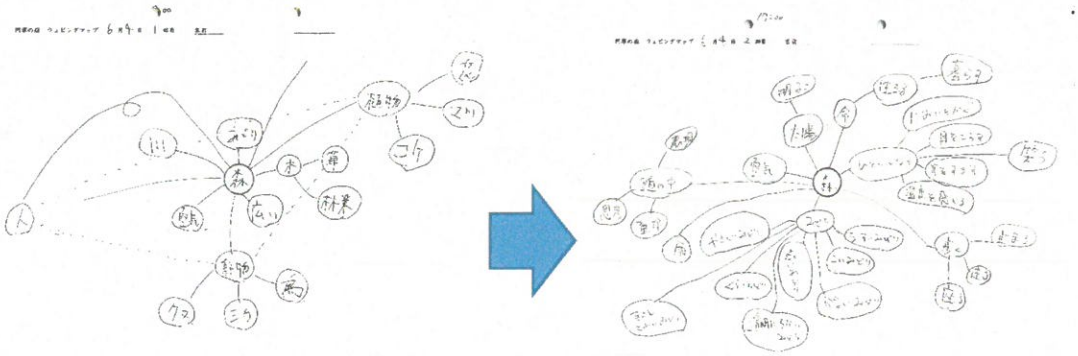
阿寒湖小学校 6 年生において 3 日間、合計 4 時間の授業を行った。阿寒にある素材を用いて、土地のつくりの学習を行うと共に、雌阿寒岳が噴火した際の降灰範囲を検討した。その中で、阿寒湖小学校との連携を少しずつ取ることができた。

3　成果と課題

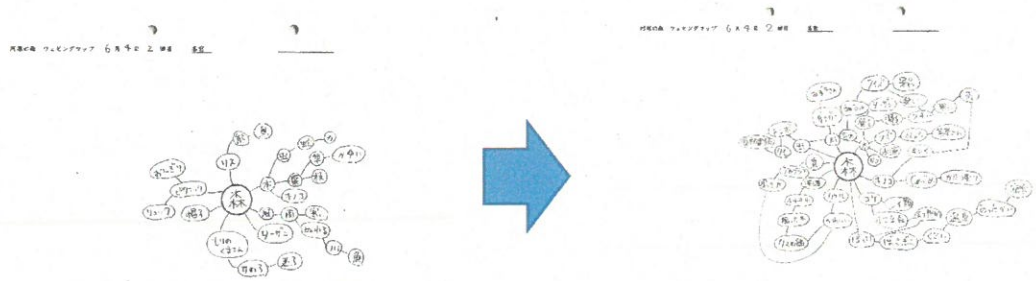
(1) 学生の変容

阿寒の森実習（以下：、森実習）の始まり及び 2 日目、3 日目に森から連想できる言葉を書かせ、さらにそこからイメージできる言葉をつなげて書かせている。1 日目と 3 日を比較することで、どのような言葉を個々が書いているかで、イメージがどのように広がっているかを検証した。

森が初めての学生（2 年生）



森が初めての学生（2 年生）

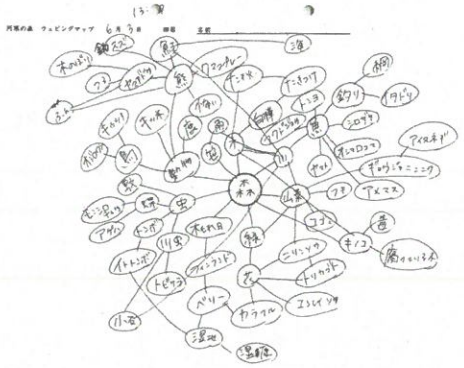


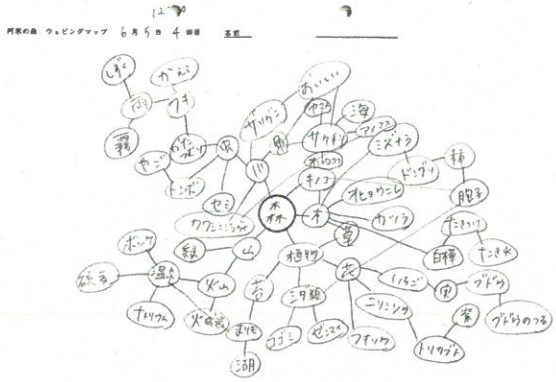
多くは阿寒の森を初めて経験した学生である。ほとんどの学生は森のイメージがテレビなどの情報から得られたものである。しかし、2 日間の夏の森を経験することで、匂い、触感、音など、様々な経験から得られた情報として描かれている。この傾向は参加者全てに見られる傾向である。「森を見る目が変わった」「森と一つになった」など、森が初めての学生は、3 日間で自分と森を身近に感じていることがわかる。

また、森を経験している学生は、今までの経験にさらに新しい見方・考え方が加わっている。「ザリガニの探し方」に言及したり、「ゼンマイが繁茂していることから、森と温泉地帯の役割を検討したい」「植

物、動物それぞれの生物が互いに影響し合い、共生し、支え合っている。その中での森の役割を考えてみたい」など今後追求してみたい内容に言及するものもいる。森から新しい刺激を受けていることがわかる。

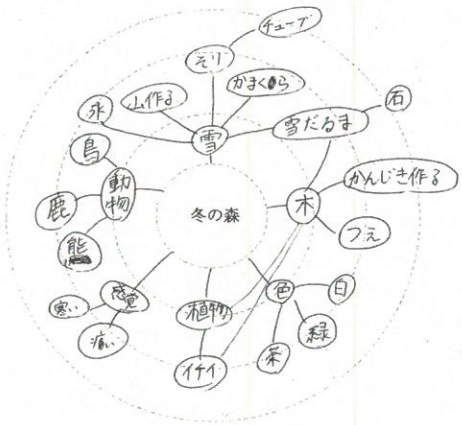
森を経験している学生（院生）

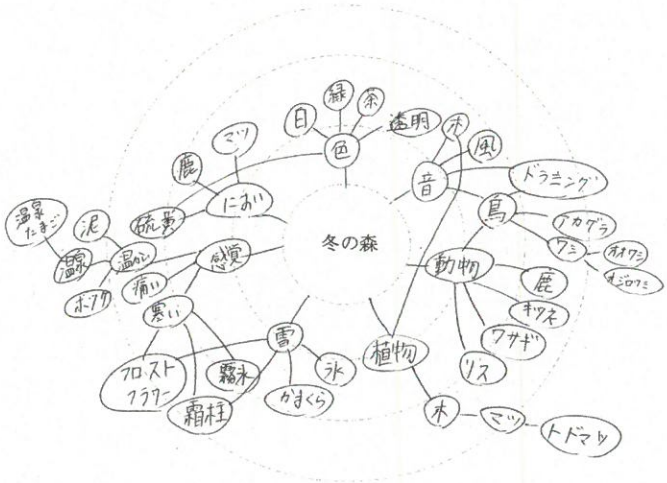




また、冬の森では夏には見られない学生の姿がある。夏の森を経験することで「何を見てみたいのか」「どこに行きたいのか」「何をしたいのか」が明確になっている。「夏からの変容「夏の生物の住み処の変化」など、夏の経験をもとにした課題を持つ学生が多くなる。さらに、冬の森を経験することで、見方・考え方が変わってきている。

冬の森が初めての学生（2年生）





このように、森を経験することで以下の事がわかってきた。

1：森の経験の無い（少ない）学生は、森のイメージはテレビなどの映像によって形成されている。
2：森に対するイメージは、森を経験することで、五感を働かせ全身で感じて得られたにことに変化している。
3：経験者は、今までの経験をベースにして、新しい見方・考え方を加えることができている。
4：経験を元にした見方・考え方をは季節が変わってもできる
5：森の中での様々な経験・体験をすることは、問題を見いだし、自ら解決していく（又は）自ら関わっていく姿をつくるきっかけになる。

(2) 教師の変容

森での1回の研修で教員（大人）はどのように変化するかを検証した。

学生同様、森での経験は、様々な見方・考え方を教員に与えることがわかってきた。経験することで、森で何かをしてみたいというように変化することもわかる。経験が少ないと感じている方々は、「食物連鎖・自然の営みを感じることができた」「四方から来る光、香り、音・・・現地にいって感じることが大切だ」「子どもの感性を育てるにはすばらしい場所になる」。学校で地域学習を行っている方々は「森や湖など中心になるモノから派生するイメージを思い浮かべて森に入ることで、それぞれの自然が互いにつながっている事を実感する」「身近に感じる学習・つながりを知り自分たちが環境の中にいることを実感する学習ができる」など、森を実際に体験することで様々な思いが派生していることがわかる。

絶対数が少ないため明らかな結果は出すことができないが、傾向として、森を経験することによって、自然の見方や考え方が変わっていくことがわかる。

(2) 学校の変容

阿寒湖小学校で4時間、6年生の「土地のつくりと変化」の学習を行った。阿寒湖畔には多くの自然素材があり、6年生の学習にとって地元の素材を使って学習が展開できることがわかってきた。このことから阿寒湖小学校と継続して教材開発を行うことで、子どもたちに身近な環境で学ぶことの重要性、そして先生方に阿寒湖沿いの素材を活用できることを伝える事ができるという1つの方針が出てきた。今後も、継続して阿寒湖小学校の教員と関わることで、阿寒湖畔の素材を活用した教材開発を行い、森の活用への道筋をつけていきたい。

4　おわりに

きっかけポン！教育の森　は、はじまって1年目である。大きな成果はまだ見ることはできないが、その芽は出つつある。阿寒の森は、学生、教員にとって学習の場として活用でき、そこでの経験は、「森の教育的な価値」を理解させるきっかけとなることがわかってきた。さらに、経験を積むことで森が好きなり、森を活用してみたくなるきっかけができていると感じる。まさに「教育で活用してみたい」「何かやってみたい」という気持ちが湧き上がってきていると実感する。

「ポン」とは簡単にはいかないが、この取り組みが継続されていくことで森を活用できる教員が育っていくという小さな確信が芽生えてきている。また、教員研修によって多くの教員が経験し、阿寒の自然を共有することによって阿寒での実践が生まれてくると感じる。教員研修は、多くの教員に阿寒での研修を受けてもらえるよう方策を練らねばならない。

29年度は、28年度に経験した学生が、どのように変容していくか。その変容が、新しい学生にどのような影響を与えるか。が視点になっていく。

「きっけかポン！教育の森事業」の成果が出てくるのは、ここで学んだ学生が、教員になり数年経った時である。ある程度経験を積んだ教員が新しい実践を生み出そうとするときが1つの契機である。そこまではまだ数年、十数年かかるだろう。この事業の結果はまだ先のことである。